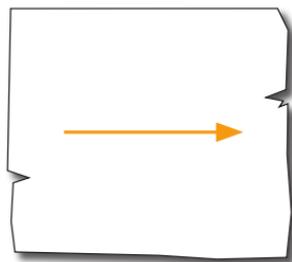


# 7 THE 7 FRAMES FOR LIFE 7つのワクワク枠 となりのコンパス③

## 第3フレーム



木岬 さんぽ  
KIMISAKI SAMPO

ライフは、  
この上ない宝じゃ。

愛犬ランプベリー、おじいさん…とふれあう  
少年期さんぽのフルーツフル成長物語

SAMPO FRUITS



## となりのコンパス③

『 → 』

### プロローグ

49

ランプベリーは、いつしか昼寝<sup>ひるね</sup>を始めていた。

「——で、おじいちゃんの将来<sup>しょうらい</sup>は？」 僕は、軽い<sup>かる</sup>気持ち<sup>きもち</sup>で尋ねた。

「——。 ——わしやあ、死ぬ<sup>し</sup>だけじゃな」

「——」 . . .

しばし沈黙<sup>ちんもく</sup>が流れた——

かと思うと、おじいさんは再び<sup>ふたたび</sup>口<sup>くち</sup>を開いた。

「——というのは、冗談<sup>じょうだん</sup>じゃ。

こう見えてもな、わしにも、たーんと将来<sup>しょうらい</sup>の夢<sup>ゆめ</sup>や目標<sup>もくひょう</sup>がある。

内容<sup>ないよう</sup>は、秘密<sup>ひみつ</sup>じゃがの」 おじいさんは、ゆったり心笑<sup>こころえ</sup>んだ。

「——」

「それに、わしには、すてきな思い出<sup>おもいで</sup>たちもある。

それに、わしには、幸せ<sup>しあわせ</sup>な今<sup>いま</sup>もある——」 満足<sup>まんぞく</sup>そうな笑<sup>え</sup>みを浮かべているおじいさん。「みんな大好き<sup>だいすき</sup>じゃ。みんな——」 おじいさんは、そのまま、座<sup>すわ</sup>った姿勢<sup>しせい</sup>で目<sup>め</sup>を閉じた。

「スー —— スー —— スー —— …」 かすかに寝息をたてているおじいさん——。僕は、おじいさんが自然に目を覚ますまで、ぼんやりと水平線の彼方を眺めていることにした。

## 50

「——あ？ すまん、すまん。思わず、夢の中に入り込んでしまうたわい。やっぱり、もう年じやのう。アッハッハッ！」

「——。おじいちゃんの人生—— これからも、長いんだかんね？ これからも、ずっと—— ずっと——」

「——」 おじいさんは、何も言わずに再び目を閉じた——  
かと思うと、口を開いた。「——サンキュー」

飛行機雲のラインが、大空高く描かれている様子が見える——。

「思ったんだけどさあ、7つのフレーム・フォー・オール・ライブ—— 7つのワクワク枠って、結局は何のためになるの？

——ゴールは、いったい何？」率直に尋ねてみた。

「——。 ——ん？ 前に話さなかったっけ？」とおじいさん。

「え？ ——聞いたっけ？」

「——まあ、いずれにせよ、そいつは、いや、そいつも—— おまえさんに任せるのが一番よいじゃろう」

「——。 ——どうして？」

「——。 はて、どうしてかな——」

4 となりのコンパス

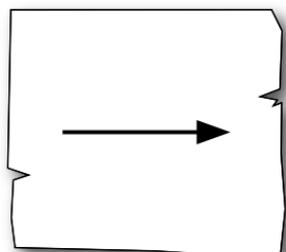
「——」 . . .

「——うむ。では、そろそろ、<sup>だい</sup>第3フレームについて<sup>せつめい</sup>説明しようかの」

「ああ、<sup>き</sup>ほい来た」 <sup>ぼく</sup>僕は、おじいさんに<sup>ちず</sup>地図を<sup>てわた</sup>手渡した。

音楽——テーマ曲イン  
♪ハーモニー Harmony  
タイトル流れて。  
——音楽フェード・アウト

# 第3フレーム



## 51

「よーく見ておれよ。こうじゃ」 おじいさんは、まず、紙の上で  
指を滑らせながら、左から右へとゆっくり移動させた。あたかも、  
そのスピードにも意味があるかのように——。

すると、次に、その末端にVの字を90度回転    
させたものを付け加えた。思わず、空の飛行機雲をちらりと見た。

「へ？ 何だこりゃ？ これでおしまい？」

「そうじゃのお。ほかには——」 今度は、ぐるりと円を描いたり、  
クルクルらせんを描いたり、波打つように描いたり、ジグザクに  
描いたりして、それぞれの末端に“回転V”を付け加えた。



前に夢の中で見た空飛ぶコンパスの“メチャメチャな動き”を、  
ふと思い出した。「おじいちゃん——、——なめんでない」

「なめておらん。大まじめじゃ。まあ、最初のまっすぐのやつは、  
ほんの一例にすぎないということじゃな」

「それにしても、——いったい何だこりゃ？」

「第3のワクワク枠、第3の“フレーム・フォー・オール・ライフ”  
じゃ。少なくとも、いろーんな“ライフのあり方”があることを教  
えてくれる」

「こんなの—— わかりっこないよ」

「そうか？ ——それでは、わしゃあ、これから昼寝タイムじゃ」

「あ？ さっき眠<sup>ねむ</sup>っていたじゃん」

「アッハッハッ！ 昼寝<sup>ひるね</sup>イコール睡眠<sup>すいみん</sup>だとは限<sup>かぎ</sup>らんじゃろ？」

「は？」

「さて、これから気<sup>き</sup>合<sup>あ</sup>い入<sup>い</sup>れて横<sup>よこ</sup>になって昼寝<sup>ひるね</sup>しようかの」 おじいさんは、そのまま本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>に横<sup>よこ</sup>になった。「——昼寝<sup>ひるね</sup>タイム、スタート。カーン♪」

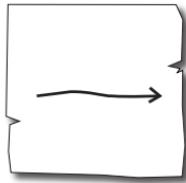
「どうしてゴング<sup>な</sup>が鳴<sup>な</sup>るんだよ。それに、そもそも、なぜ昼寝<sup>ひるね</sup>なんて——。 ——時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>がもったいないよ」

「まあ、生<sup>い</sup>きているから—— そう答<sup>こた</sup>えておこうかの」

そのとき、この第3フレームのすごさを、全<sup>ま</sup>く想<sup>そう</sup>像<sup>ぞう</sup>できなかつた。

## 52

家<sup>いえ</sup>に帰<sup>かえ</sup>ると、さっそく鉛筆<sup>えんぴつ</sup>で書<sup>か</sup>き入<sup>い</sup>れてみた。



ちょっと曲<sup>まが</sup>っちまったけど—— ま、いっかあ。

おじいちゃん、あれこれゴチャゴチャと描<sup>えが</sup>いていたしなあ。

「おーい、わかる？」 手<sup>て</sup>に持<sup>も</sup>つと、さっそくコンパース<sup>はな</sup>に話<sup>はな</sup>しかけてみた。

「ほいほーい♪ わかるのでございますう〜♪」 いつものあの<sup>こえ</sup>声<sup>こゑ</sup>。

「よっ、<sup>ひさ</sup>久しぶり。——それにしても、<sup>だい</sup>第3フレームってさあ、  
<sup>まった</sup>全く、ふざけているよね？」

「なぜ、そのように思うのでございましょう〜？♪」

「なぜって、そうじゃん。メチャクチャ<sup>なん</sup>何でもありのようだし——  
<sup>まった</sup>全く意味不明だし——<sup>だれ</sup>誰がどう<sup>み</sup>見たって、<sup>おも</sup>そう思うはずだよ」

「なるほどお〜♪ そのような理由<sup>りゆう</sup>がございましたので、<sup>じやくかん</sup>若干の、  
<sup>りつぷく</sup>ご立腹モードなのですnee〜♪」

「——あれ？ やっぱり、どことなくキャラクターが<sup>か</sup>変わっている  
<sup>き</sup>気がする——」

「ギャハハ！ きっと、アップグレードしたからなのでございます  
よお〜♪」

## 53

<sup>だい</sup>第3フレームを利用した<sup>りよう</sup>プチ・マップ<sup>づく</sup>作りは、<sup>ひとすじなわ</sup>一筋縄では行かな  
かった。

その後も、そのことを<sup>なんど</sup>何度も<sup>かんが</sup>考えてみたものの、さっぱり<sup>い</sup>意味が  
わからないまま、<sup>す</sup>ときが過ぎるだけだった。

そして、<sup>なつ</sup>夏が<sup>お</sup>終わりを<sup>つ</sup>告げ——<sup>あき</sup>秋が<sup>ふか</sup>深まりつつあった、ある<sup>は</sup>晴  
れの<sup>ひ</sup>日の<sup>あさ</sup>朝——<sup>い</sup>ランプベリーが<sup>いき</sup>息を<sup>ひき</sup>引き<sup>と</sup>取ったんだ。

音楽イン ♪秋 Autumn

——ショックだった。<sup>な</sup>泣いた。へこんだ。

それでも、<sup>につちゅう</sup>日中に<sup>いっ</sup>一家で<sup>ひととお</sup>一通りのことを<sup>す</sup>済ませた。

その日の夕方——僕は、ベッドの上に横になり、天井を眺めながらランプベリーのことを振り返った。

ランプベリーは、祖母の家で生まれて間もない子犬の頃に、おじさんの車で運ばれて初めて家にやって来たんだっけ——。

初めて家にやって来たとき、ダンボール箱の中で“クンクン、クンクン…”と弱々しく鳴いていたランプベリー。

おそろおそろ初めて抱っこした僕の顔を、ペロペロしていたランプベリー。

投げたボールを、しっぽを振りながら追いかけたランプベリー。

初めて外の犬小屋で夜を明かす晩に、遅くまで付き添っていたときの不安げなランプベリー。

毎日のように海辺や川辺へと一緒に散歩していたランプベリー。

子犬を3匹産んだランプベリー。

おじさんにじゃれつき、顔をペロペロなめていたランプベリー。

穴を掘り続けている僕を、のぞきこんでいたランプベリー。

イチゴを器用に食べていたランプベリー。

砂浜をかけまわっていたランプベリー。

仰向けになり、じっと気持ちよさそうにしていたランプベリー。

励ますかのように、そばに寄り添ってくれていたランプベリー。

…

「大丈夫でございましょうか？ よろしければ、代りに、わたくしをランプベリーとお呼びになるのでございませう〜♪」心配してくれたコンパースが、そのように声をかけて励ましてくれたこともあった。でも——、——それでも、ダメだった。

それから何日か経過したある日——

いつもの散歩コースにある橋の端に座り、そこから、山の端に沈もうとする太陽が生み出す“川面のキラキラ”を、ぼんやりと一人で眺めていた。

この光景を、何度、ランベリーと一緒に眺めただろう？

——なんで、死にしまったんだよ？ ランベリー。

...

どれくらいの時間が経ったのだろう。

ある考えに、ようやく、たどり着いたんだ。

——わかったよ。ランベリー。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

ゆっくり立ち上がった僕は、家へ向けて、思い出いっぱいの散歩道をしっかり歩き始めた。

## 54

音楽イン ♪美しき自然 Beautiful Nature

「おーい、わかったよ！ 第3フレームの意味！」

「ほい〜？ ♪ 何でございましょうか〜？ ♪」

「うん。“流れ”を意味しているんだよ！」

「ほいほいー ♪」

「例えば——

太陽がしずむ流れ—— つまりは、地球が1日に1回、  
 自転すること。(『朝 → 昼 → 夕 → 夜 → …』)

季節がめぐる流れ—— つまりは、地球が1年に1回、  
 太陽の周りを公転すること。(『春 → 夏 → 秋 → 冬 → …』)

雲が雨となり、川として海へ注ぎ、再び、雲となって空に浮かぶ流れ。(『雲 → 雨 → 川 → 海 → 雲 → …』)

葉っぱの中で、水と二酸化炭素と光から、炭水化物と酸素が作られる流れ。(『水 + 二酸化炭素 + 光 → 炭水化物 + 酸素』)

種子から芽が出て葉や茎が育ち、花が咲き、実を結び、再び、種子ができる流れ。(『種子 → 芽 → 葉っぱ & 茎 → 花 → 果実 → 種子 → …』)

食べものが生産され、運ばれ、お店に並び、買われて、食卓に並ぶ流れ。(『食料品の生産 → 物流 → お店 → 購入 → 食卓』)

水や電気、ガス… が、各家庭へ供給される流れ。  
 (『供給者(供給装置) … → 水道管、電線、ガス管 (or ガスボンベ) … → 家庭』)

工場で製品が作られ、運ばれ、お店に並び、買われて、家庭で使われる流れ。(『製品の生産 → 物流 → お店 → 購入 → 家庭』)

リサイクル or リユースする流れ。  
 (『使わなくなったもの → 回収 → 再利用 → …』)

いえ すなはま すなはま いえ かえ なが  
 家から砂浜へでかけ、砂浜からまた家に帰ってくる流れ。  
 (『家 → 砂浜 → 家』)

ペダルをこいで、クルクルとタイヤを回す流れ——   
 つまり、自転車に乗ること。(『キ → コ → キ → コ → キ → コ → …』)

いっ ぽ いっ ぽ なが  
 一步一步の流れ—— つまり、歩くこと。  
 (『右足 → 左足 → 右足 → 左足 → …』)  
 (『テ → ク → テ → ク → テ → ク → …』)

しんぞう なが けつえき たいない じゆんかん  
 心臓のドキドキの流れ—— つまり、血液が体内を循環すること。  
 (『ド → キ → ド → キ → ド → キ → …』)  
 (『心臓 → 動脈 → 脳、肺、胃腸… → 静脈 → 心臓 → …』)

いき す は なが こきゅう  
 息を吸ったり吐いたりの流れ—— つまり、呼吸すること。  
 (『ス → ハー → ス → ハー → …』)

なか す た なが  
 お腹が空いたり食べたりの流れ。  
 (『お腹が空く → 食べる → お腹が空く → 食べる → …』)

ねむ め ぎ なが  
 眠ったり目覚めたりの流れ。  
 (『眠る → 目覚める → 眠る → 目覚める → …』)

いのちある存在が生まれ、育ち、年月を重ね—— いか せいめいりよく  
 をなくし—— 土や空気、海や川といった自然の中へ還る流れ。  
 (『いのちが生まれる → 育つ → 年月を重ねる → … → 生命力をなくす  
 → 自然の中へ還る。 → …』)

お ち こ から た ち 直 り、元 気 になる 流 れ。  
 (『落ち込み → 元気』)

ある 人 生 から ある 人 生 へ “ラ イ フ の あ り 方” を 変 え る 流 れ。  
 (『ある人生 → ある人生』)

コ ン パ ー ス が ア ッ プ グ レ ー ド す る 流 れ。  
 (『カタチ コトバ カラダ アタマ』  
 → 『カタチ コトバ カラダ アタマ』 + 『カコ イマ ミライ』  
 → 『カタチ コトバ カラダ アタマ』 + 『カコ イマ ミライ』 + 『→』)

人 が 赤 ち ゃ ん と し て 誕 生 し、親 に 抱 か れ — 成 長 & 発 達 し、  
 花 が 咲 き、実 を 結 び — … い つ か 赤 ち ゃ ん を 誕 生 さ せ、親 と し て  
 赤 ち ゃ ん を 抱 き … を 繰 り 返 す 流 れ。  
 (『誕生する → 成長 & 発達する → 花が咲く → 実を結ぶ → …  
 → 赤ちゃんを誕生させる → 親として赤ちゃんを抱く → …』)

思 い 描 く 未 来 の シ ナ リ オ (筋 書 き) の 流 れ。  
 (『高校に行く → フルーツのような何かを、自分らしくどうやって生み  
 出すかを見つける → 努力を積み重ねる → 実現する → …』)

…

ど れ も こ れ も が、こ の 第 3 フ レ ー ム の 枠 で 説 明 で き る ん だ よ !」  
 「ほういほういほういー! ♪」

「そう言えば、ずっと前に、おじいちゃん、“ライフが変わることは、  
 生きている証だ”と話していた。それに、呼吸のスーハスーハー  
 や心臓のドキドキなんかも、まさに生きている証だと言えそうだし。  
 — そうだよ! 第3フレームは、人生はもちろん、生きている

こと、いのち、<sup>せいめい</sup>生命、<sup>せいかつ</sup>生活、ライフライン、ライフサイクル、<sup>せいちょう</sup>成長  
 や<sup>せいじゅく</sup>成熟、アップグレード…を<sup>あひ</sup>含む、あらゆるライフの<sup>いとま</sup>営みを<sup>せつめい</sup>説明  
 してくれる、もの<sup>こんぼんてき</sup>すごく根本的なフレームなんだよ！ だから、フ  
 レーム・フォー“オール・ライフ”なんだよ。きつと——。僕は、  
 そう<sup>おも</sup>思うよ！」

「——お<sup>げんき</sup>元気になられて、よかったですう〜♪ ウルルル… ウル、  
 ウル…」

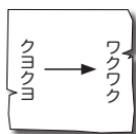
「ありがとう。<sup>しんぱい</sup>心配かけて、ごめんよ」

「ウル、ウル… ヒィック」

「——。 <sup>き</sup>決めたんだ——。

ランプベリーのおかげで<sup>たの</sup>楽しかった日々の<sup>ひび</sup>思い出を<sup>おも</sup>心に<sup>で</sup>しっかり  
 と<sup>きざ</sup>刻みながら、<sup>まえ</sup>前を<sup>む</sup>向いて<sup>い</sup>生きるんだ！

ずっとクヨクヨしながら<sup>くら</sup>暗く<sup>い</sup>生きるのではなく、できるだけワク  
 ワクしながら<sup>あか</sup>明るく<sup>い</sup>生きるんだ！



心<sup>こころ</sup>の中<sup>なか</sup>のランプベリーとともに——」

「ヒィック、ヒィック、ウル、ウル… ヒィック」

「しかも、それは、きつと—— <sup>かな</sup>悲しみを<sup>の</sup>乗り越えながら、<sup>あか</sup>明るく  
 生きているおじいさんが、<sup>み</sup>身をもつて<sup>おし</sup>教えて<sup>く</sup>れていることでもあ  
 るはずだ——」

「ヒィック、ヒィック、ヒィック…」

## 55

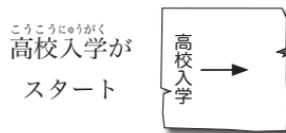
それから、第3フレームを利用した新しいプチ・マップの作り方が、次々と見つかった。

『先 → 後』

『起 → 承 → 転 → 結』

『接続詞 (そして、だから、なので、おかげで、しかし、でも、ところが…)』  
= 『 → 』

『スタート → プロセス → ゴール』

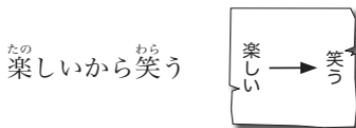


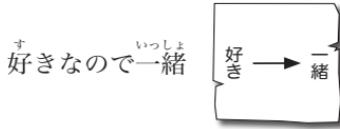
『根拠 → 結論』

『原因 → 結果』

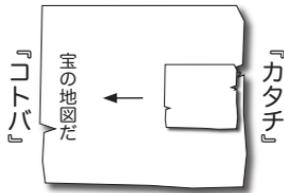
ランプベリーがいたおかげで、<sup>たの</sup>楽しかった。  
(『ランプベリーがいた → <sup>たの</sup>楽しかった』)

生きている—— だから、<sup>ひるね</sup>昼寝する。  
(『生きている → <sup>ひるね</sup>昼寝する』)

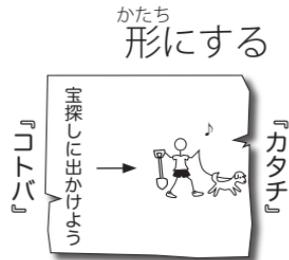




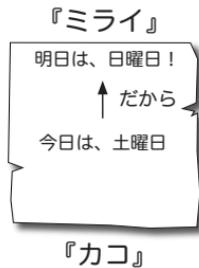
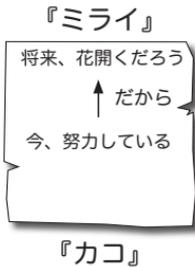
ことば  
言葉にして



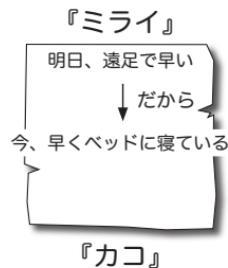
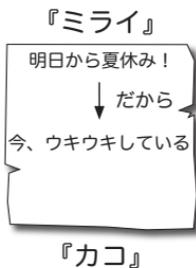
だから



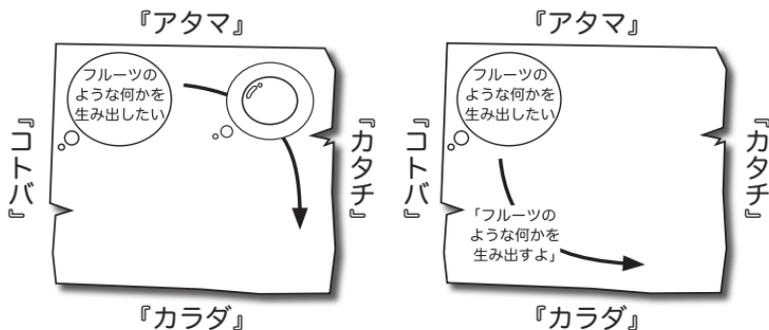
『イマ』 → 『ミライ』 がある一方いっぽうで——



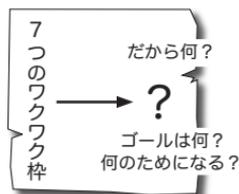
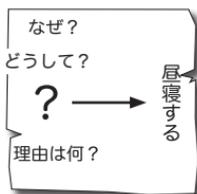
『ミライ』 → 『イマ』 もある。



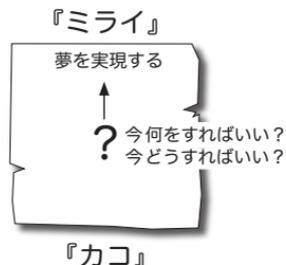
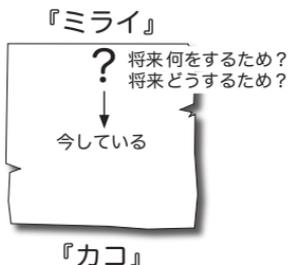
あたま なか かたち 頭の中で形にしてからの**ふげんじっこう** 不言実行がある**いっぼう** 一方で、あたま なか かたち 頭の中で形にし  
ないままの**ゆうげんじっこう** 有言実行もある。



『なぜ?』『どうして?』『理由は何?』がある一方で——  
『だから何?』『ゴールは何?』『何のためになる?』もある。



『将来何をするため?』『将来どうするため?』がある一方で——  
『今何をすればいい?』『今どうすればいい?』もある。



## 56

コンパスとの別れは、予想通り、雪解けの季節に訪れた。

それは、中学卒業を間近に控えた頃でもあった。

音楽イン ♪春 Spring

「オーナー様へのお仕えは、これで引退なのでございますう〜♪

これからは、結婚して幸せな家庭を築くという夢を実現するため、努力して参ろうと思っっているのでございますう〜♪

——そうなのでございますう〜♪ 引退は、ゴールであると同時にスタートなのでございますう〜♪ ギャハハ！」

「うん。応援しているよ」

「ありがとうございますのですう〜♪」

「——うん。ところで君は、このあと、どこに行くことになるんだい？」

「——。きっと、どこにも行かないのでございますよお〜♪」

「——え？」

「いつも、近くにいたのでございますう〜♪」

「え？ 近くって——、——どこ？」

——ここにいるのでございますう〜♪

「——。コノヤロ、コノヤロ、コノヤロ！ 映画みたいなことを言いやがって！」

「ギャハハハ！」 「アハハハッ！」

僕は、一緒に笑った。

「——うん。おかげで、これまで楽しかったよ。いろいろ、どうも

ありがとう」

「こちらこそ、おかげ様さまでしたのでございますう〜♪

ありがとうございますでしたですう〜♪

——それでは、そろそろお別れのお時間わかじかんなのでございますう〜♪

お元気げんきでいらっしゃるのでございますう〜♪ さようならなので  
ございますう〜♪」

「さようなら。君きみもお元気でげんき」

あいさつが済んでから間もなく、コンパースの表面ひょうめんの『→』と  
コンパースの針はりの絵えが、ジワジワと消えた。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

## 57

ちゅうがく そつぎょう ぼく はる そのままと じもと こうこう しんがく  
中学を卒業した僕は、その春、そのまま地元の高校に進学した。

そうして、こうこうせい さいしよ むか しょか  
そして、高校生として最初に迎えた初夏——

音楽イン ♪夏 Summer

は ひ ひとり みさき む  
晴れの日に一人で岬へ向かった。

いつもの下り勾配くだ こうばいにたどり着くと、いつもの場所ばしょにキラリを見つ  
けた。

「お、いるいる！ ——アハッ！ 相棒あいぼうとは、よく言ったもんだよ。  
——おーい、おじいちゃーん！ やって来たぞお〜！」

しかし、キラリに近づくとつれ、足の動あしきが鈍あしった。

音楽 突然停止 ♪夏 Summer

まるい<sup>いし</sup>石の近くに存在していたのは、おじいさんではなく、ビンだけだったんだ。

ビンの中には、紙<sup>なか</sup>が折<sup>かみ</sup>りた<sup>お</sup>たんで入<sup>はい</sup>っていた。

——地<sup>ち</sup>図<sup>ず</sup>？

ぼうぜん<sup>ぼうぜん</sup>呆然としながらも、中<sup>なか</sup>身<sup>み</sup>を取<sup>と</sup>り出<sup>だ</sup>して広<sup>ひろ</sup>げてみた。

すると、それは手<sup>て</sup>紙<sup>がみ</sup>だった。

音楽イン ♪冬 Winter 手紙& 58へ続く

わかもの

# 若者へ

わしは、もうダメじゃ。

い  
生きている間に

おまえさんに

どうしても<sup>つた</sup>伝えておきたいことがあるから  
てがみ<sup>か</sup>手紙を書かせておくれ。

ライフは、  
この<sup>うえ</sup>上ない<sup>たから</sup>宝じゃ。  
し<sup>ほう</sup>至宝じゃ。

い  
生きていること——

それは、とっても、ありがたいことじゃ。

とっても、うれしいことじゃ。

とっても、すごいことじゃ。

どんなに、さき<sup>おも</sup>いに思えることも  
<sup>かぞ</sup>数えきれないほどのミラクル<sup>うえ</sup>の上に  
<sup>な</sup>成り立<sup>た</sup>っておることじゃ。

<sup>こきゅう</sup>呼吸できること  
<sup>わら</sup>笑えること <sup>な</sup>泣けること  
<sup>かつどう</sup>活動できること <sup>やす</sup>休めること  
<sup>おも</sup>思い出<sup>だ</sup>せること <sup>みらい</sup>未来を夢見<sup>ゆめ</sup>られること  
<sup>はな</sup>話せること <sup>き</sup>聞けること  
<sup>あい</sup>愛せること <sup>あい</sup>愛してもらえること  
 …

これらは、<sup>ぜんぜん</sup>全然あたりまえのことじゃない。

そりゃあ、ときには、  
<sup>しっぱい</sup>失敗したり、<sup>きず</sup>傷ついたり、<sup>こうかい</sup>後悔したり  
 せつな<sup>くる</sup>なかったり、苦しかったり…  
 もあるかもしれん。

じゃがな、これらすべてをひっくるめても、  
<sup>だんげん</sup>断言できる。

ライフは  
この<sup>うえ</sup>上<sup>たから</sup>ない宝じゃ。

しほう  
至宝じゃ。

ライフそのものが  
たからもの  
宝物なんじゃ。

プレゼントされたいのちを大事にだきしめながら、自分らしく、幸せに生きるんじゃないぞ。  
それが何よりの親孝行でもある。

大きくなったおまえさんと再会できて、  
とっても、とっても、うれしかったよ。  
これまで、毎年来て相手してくれて、  
どうもありがとう。

それじゃあ、達者でな。

岬のおじいさんより

お父さん、お母さんにも、よろしく。

この丸い石は、わしらの形見だと思って、  
お守りだと思って、かわいがってやってくれ。

新たなフレーム・マスターの居場所は、  
その地図が教えてくれるはずじゃ。

## 58

そりゃないぜ、おじいちゃん——・・・

<sup>なみだ</sup>涙があふれて—— あふれて——

おじいちゃんの、あの<sup>まんぞく</sup>満足<sup>え</sup>そうな<sup>おおわら</sup>笑いも、あの立てた親指を前後  
させるしぐさも、あの<sup>おおわら</sup>大笑いも… どれもこれもひっくるめて——

おじいちゃんのライフそのものが、この<sup>うえ</sup>上ない<sup>たから</sup>宝<sup>たから</sup>だったんだ。

・・・

<sup>なみだ</sup>涙でぼやけている<sup>うみ</sup>海<sup>すいへいせん</sup>や<sup>すいへいせん</sup>水平線<sup>すいへいせん</sup>——。

ランプベリーもいなくなっちゃったし、コンパースもいなくな  
っちゃった。そして、おじいちゃんまでいなくなっちゃった。

<sup>ぜんしん</sup>全身<sup>ちから</sup>の力が<sup>ぬ</sup>抜けた<sup>ぼく</sup>僕は、ガックリと、ひざまずいた。

そのとき——

あっ！

<sup>ちから</sup>力の<sup>ぬ</sup>抜けた<sup>ゆびさき</sup>指先<sup>かぜ</sup>から、<sup>の</sup>風<sup>の</sup>に乗って<sup>ちず</sup>地図<sup>ま</sup>が舞<sup>ま</sup>いあがった。

かと思うと、そのまま<sup>かぜ</sup>風<sup>の</sup>に乗って、<sup>うみ</sup>海<sup>ほう</sup>の方<sup>む</sup>へと向<sup>む</sup>かった。

<sup>ちず</sup>地図<sup>みうしな</sup>を見<sup>かいかん</sup>失<sup>すこ</sup>うまいと<sup>くだ</sup>海岸<sup>だんがい</sup>を少し<sup>だんがい</sup>下<sup>ぜつべき</sup>って<sup>ちてん</sup>断崖<sup>く</sup>絶壁<sup>く</sup>の地点<sup>く</sup>まで来<sup>く</sup>る  
と、そのまま<sup>み</sup>身<sup>の</sup>を<sup>だ</sup>乗り<sup>だ</sup>出して、<sup>ちず</sup>地図<sup>ゆくえ</sup>の<sup>お</sup>行<sup>お</sup>方を<sup>お</sup>追<sup>お</sup>った。

<sup>ちず</sup>地図<sup>かいかん</sup>が、<sup>ま</sup>ひら<sup>ま</sup>ひら<sup>お</sup>海面<sup>み</sup>まで舞<sup>お</sup>い降<sup>み</sup>るのが見<sup>み</sup>えた。

<sup>なみだ</sup>涙<sup>ちず</sup>でぼやけている<sup>なみ</sup>地図<sup>ゆ</sup>は、<sup>すこ</sup>プカ<sup>と</sup>プカ<sup>とお</sup>と波<sup>と</sup>に揺<sup>と</sup>られ、<sup>すこ</sup>少し<sup>と</sup>ずつ<sup>と</sup>遠<sup>と</sup>ざ<sup>と</sup>かっている<sup>き</sup>気がした。

## 59

みんな、いつか、いなくなるということ——

だれもが——

いつか生まれ、いつか死ぬということ——

手元の丸い石と手紙をぼんやり眺めながら、しばらく思いめぐら  
せた。 ——とそのとき、ハッとしたんだ。

少なくとも遺された形や言葉は、生き続けるんじゃないか？

そうだ！ この石とこの手紙が、そのことをはっきり教えてくれ  
ているんだ！

遺された形や言葉は、石や手紙だけじゃない。おじいちゃんの風  
貌やふるまい、笑い声や話し声…を含む、心の中に遺された形や言  
葉もある。これらは、心の中で生き続ける。

それに、おじいちゃんが遺した形や言葉が生き続ける一方で——  
明るさ、ユーモア、優しさ、愛情…を含む、おじいちゃんの心も、  
僕の心の中で生き続ける。

つまり、おじいちゃんとお会ったおかげで育まれた僕自身の心も、  
生き続ける。

——そうだ！ 決して、生まれる前の、もとの状態に戻るわけじゃ  
ないんだ！

何かは遺り、何かは生き続けるんだ。

誰もが何かを遺し、誰もが、何らかの形や言葉で生き続けるんだ。

きっと—— ずっと——

・・・

## 60

それから、なぜか——

3匹の子犬たちを産んだランプベリー

僕らを出産してくれた母

何年も幼虫として地中で暮らし、

ある夏に羽化して成虫として次世代を生むセミたち

多くの種を実らせるヒマワリ …

のことが、次から次へと頭に浮かんだ。

そうだ。

生きものたちは、決して、ただ生まれて死ぬだけじゃない。

生きている間に、精一杯“ライフのリレー”を達成しようとして

いるんじゃないか？

この“ライフのリレー”は、この地球上の生命の誕生のときから  
ずっと何十億年も続いているはずだ。

だから、今生きている生きものたちは、本来、全力で“ライフの  
リレー”を達成しようとしている真っ最中であるはずだ。

確かに、おじいちゃんのように、実の子孫を誕生させるといふ形  
では“ライフのリレー”を達成できない場合もあるだろう。

しかし、その場合も、別の形で、別の意味で“ライフのリレー”  
を達成できるんじゃないか？ それこそ、おじいちゃんが、はっきり  
証明してくれているように——。

それに、どんな場合であっても、何らかの形や言葉で、ほかの誰  
かの“ライフのリレー”を助けることは可能だろう。

...

将来、実の子孫を誕生させられようが誕生させられまいが、どちらにしても関係ない。僕も、この“ライフのリレー”を何らかの形や言葉で全力で果たしたい。応援したい。それは、おじいちゃんを生かすことにもなるはずだ。・・・

おじいちゃん—— オレ——

フレーム・マスターになりたい。

——なるよ。

そして、おじいちゃんが遺してくれた形や言葉、心… つまり、おじいちゃんの“ライフ”を生かし続けるんだ。

音楽 ♪冬 Winter 61 へ続く

## 61

重大なことに気づいたのは、そのあとだった。

あの地図がなければ、新しいフレーム・マスターに出会えない。出会えなければ、残りのフレームが何なのかわからない。

わからなければ、フレーム・マスターになれない。

!!!

急いで海をのぞき込んだ。

どこだ!? …… ——あっ、あった! まだ見える!

いくらか離れた海面上に、地図が浮かんでいた。

海に入って取り戻す?

——いや、でも、ちとコワくないか?

もし、おぼれたりしたら——

——いや、でも、<sup>がっこう</sup>学校のプールで50メートルは<sup>よゆう</sup>余裕で<sup>およ</sup>泳げるし、  
おぼれたりはしないだろう。

うん、<sup>だいじょうぶ</sup>大丈夫さ。今<sup>いま</sup>しか<sup>いま</sup>タイミングがなさそうだし——

いや、でも——

...

<sup>まよ</sup>迷ったあげく——、——<sup>き</sup>決めた。

——サブン！

<sup>ぼく</sup>僕は、<sup>うみ</sup>海の中に<sup>なか</sup>飛び<sup>と</sup>込んだ。

音楽 ♪冬 Winter 62 へ続く

## 62

けれど——

そのときの<sup>うみ</sup>海は、<sup>あま</sup>甘くなかった。

<sup>およ</sup>泳いでも<sup>およ</sup>泳いでも<sup>ちず</sup>地図に<sup>ちか</sup>近づけないばかりか——

「あぐっ」<sup>かいめん</sup>海面の上に<sup>うえ</sup>顔を出しているのがやっとなで——

「うげっ、うごっ」——<sup>まずい</sup>まずい！ おぼれちまう！？

思いとは<sup>うらはら</sup>裏腹に、<sup>ちず</sup>地図との<sup>きより</sup>距離がますます<sup>ひろ</sup>広がる<sup>いっぽう</sup>一方で——

「おぐっ、おごっ」——<sup>ひ</sup>引き返す？ でも、<sup>ちず</sup>地図が<sup>ひつよう</sup>必要だ。

「おごげっ」——<sup>ちず</sup>地図が<sup>しず</sup>沈んだ！？

とうとう<sup>ちず</sup>地図を見<sup>み</sup>失<sup>うしな</sup>った。

音楽 ♪冬 Winter 63 へ続く

# 63

どれくらいの時間が経ったのだろうか？

岸へ戻る事が難しくなっていることに気づいた。

もがけど、もがけど岸に近づけないばかりか、まともに浮いてい  
ることさえもできなくなっていて――

それでも――懸命に、もがいた。

「ごぼっ」

・・・ ―う、うそだろ？

「うごっ」

・・・ ―こ、こんなことがあっていいのか？

「おごっ」

・・・ やってみたいことが、いっぱいあったのに――

「がぼっ」

・・・ あれとか―― これとか――

少しずつ体がついてこなくなっていた。

「あがっ」

・・・ 父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、オレ伝えなきゃ――

「ごぼぼっ」

・・・ あれとか―― それとか――

「おごごっ」

・・・ 父ちゃん、母ちゃん、兄ちゃん、オレ―― ごめんよ――

体が、とうとう、ほとんどついてこなくなった。

「——」

・・・ ああ—— ああ—— ……

音楽フェードアウト ♪冬 Winter

「おまえ～！ 何やっとうるう～!？」

そのとき、かすかに声が聞こえた。

まぼろし？

ギリギリのところで懸命に周りを見ると—— 信じられないことに、船に乗っているおじいさんが、そこにいた。

——え!？

「何やっとうる!？ おまえ!」 この耳で、はっきり聴けた。

おじいさんは、必死の形相で、腕をがっちりつかむと、渾身の力で、僕を船上に引き上げてくれた。

岸辺へ向かう船上で、僕らは、お互いに無言だった。

それでも、おじいさんは、自分の家まで僕を連れてゆき、シャワーと着替えを提供してくれた。

## 64

僕らは、水平線に見える、いつもの地点にたどり着いた。

そこでついに—— おじいさんは、立った姿勢のまま、怒りを爆発させた。

「ばかものお!! ——わしが来ておらんかったら、本当に、死んでおったぞ!!」

こんなに怒るおじいさんを初めて見た。

「だって——」・・・「——おじいちゃん、死んだんじゃ…」

「ふざけるな！！——何、寝ばけたこと、言っておるんじゃ！？ わしが死ぬと、おまえさんも、一緒に死ぬのか！？ そのことが、おまえさんがとった行動のよりどころだったのか！？ これが、わしの死から、おまえさんが導き出すことなのか！？」おじいさんの声は、震えていた。

「——」確かに、“おじいちゃんの死”を理由にするのは、間違えている——。

僕は、口を真一文字に結んだ。

おじいさんは、しばらく経ってから、静かに口を開いた。

「——むかし、巨大地震が起きて、とてつもなくでっかな津波が押し寄せてきた地域がある。

そのとき、多くの尊い命が、犠牲になってしまった。

音楽イン♪ Wishes In Sorrow

倒壊物に押しつぶされてしまった者、土砂に流されてしまった者もおった。波に飲まれてしまった者、沖に流されてしまった者もおった。

突然、人生を奪われて、夢を砕かれて—— どんなにか、つらかったことか——。どんなに無念で、どんなに悔しかったことか——。どんなに家族を心配し、どんなに残す者たちの身を案じたか——。どんなにか、二度とこのようなことが起きないように願ってくれたか—— …」

「——」

ふと見ると、おじいさんは顔をしわくちやにしている—— 涙だ  
か、汗だか、海水だか、とにかく顔がメチャクチャ濡れていた。

「彼ら彼女らが身をもって教えてくれた、かけがえのない知恵を  
大切に守り続けなければならない。

彼ら彼女らを心の中に生かし続けて、その生きていた証を、その  
愛を語り継がねばならない。

彼ら彼女らの分も、生きねばならん」

「——」 確かに、そのとおりだよ。 そう思いながら—— ありつ  
ただけの涙がこぼれ落ちていくように感じた。

「——おまえさんの人生、本当に、これからなんじゃぞ。わしより  
ずっと若い分、これから、楽しいことやうれしいことに、わしより、  
はるかにいっぱい出会えるはずじゃ。

それに—— いやなことだけでなく、いいこともある。それが人  
生じゃ。それは、自然が、脅威になるだけでなく、恵みにもなって  
くれることと同じじゃ。

じゃから、たとえ、今、どんなにつらいこと、いやなことがあつ  
たとしても—— 決して早まるんじゃないぞ。ふんばって生きてお  
れば、きっと、いいこともあるはずじゃ。そのつらさが大きいほど、  
のちの小さな喜びでさえも、よりありがたく感じられるじゃろう。

——そういう意味でも、おまえさんの人生、これからなんじゃ」

親身になって僕のために思って、そう言ってくれているのだと痛  
いくらいわかった。とてもありがたかった。

——誤解の有無は、全く関係なかった。

## 65

僕たちは、その水平線すいへいせんの見える地点みえるちてんに並んで腰こしを下ろした。

「無事ぶじで何なによりじゃった。うん、よかった。うん、よかった」しみじみと言うおじいさん。

「——。——おじいちゃん？」意いを決けつして問といかける僕。

「——ん？」

「——。手紙てがみ——」

「——ああ。——すまんかったのお」

「いったい、何なにがあったの？」

「——骨ほねじゃ」

音楽イン ♪冬 Winter

「骨ほね？」

「ああ、魚さかなの骨ほねじゃ」

「——」

「あのやろう—— どでかくて、硬かたくて、するどくて—— そいつが、のどに引ひっ掛かかちまって—— 痛いたくて、痛いたくて—— 血ちも出るし、鼻水はなみずも出るし、涙なみだも出るし、息いきもまともにできんし—— 苦くるしいのなんのって、そりゃあ、もう、絶対死ぜったいしぬと確信かくしんしたんじゃ」

「——」

「それで—— それでも—— 生いきている間に、おまえさんに、どうしても伝つたえなきやならんことがあると思おもって—— 痛いたみこらえながら—— 涙流なみだながしながら、その手紙てがみを書かいたんじゃ」

「——」

「その書いた手紙てがみをビンに入れて、石いしと一緒にいっしょいつもの昼寝ひるねの場所ばしょ

に置くと—— その場で力尽きて、いよいよ最期だと覚悟しながら、  
そのまま横になって目を閉じた」

「——」

音楽 一時中断 ♪冬 Winter

「そしたら—— そしたらよ、——夢を見たんじゃ」

「夢？」

「不思議な夢じゃった——」

その夢は、次のような内容だったらしい。

いつもの場所で横になっていると、“起きて、起きて”という感  
じで、ほっぺに刺激が加わった。

それがランプベリーのペロペロであることに気づいたおじいさん。  
“こらすぐったい。やめろ。ランプベリー。こら”と心の中で話  
かけるけれど、声が出ない。目も開かない。起き上がれない。…

すると、遠くから声が聞こえてきた。「おーい！ 元気に生き～  
ているかあ～い？♪」それは、僕の声だった。

“おーう！ 元気に生き～とるともお～！♪”と心の中で返事する  
けれど、声が出ない。目が開かない。起き上がれない。

…

「オイオーイ♪ 奮発してメロンを持ってきたぞ～♪」と僕の声。

“メロン… メロン…” 「——メロンー!!!」 おじいさんは、  
そのとき、やっと夢の中で声を出せた—— と同時に夢の中で目を  
開けられた。

「——ようやく実際に目を覚ましたのは、メロンを受け取ろうと  
する、まさにその瞬間じゃった」

「——」 ——オレたちより、メロン!?

「そしたら—— その夢をきっかけにして、次から次へと楽しかった思い出たちが心に浮かんできよった。

それに、将来の楽しみも、次から次へと浮かんできよった」

「——」

「そしたら—— なんだか妙に元気が湧いてきてよ、もうちっと頑張ってみようかなって気になっちゃって——。

——あとは気力よ」

音楽 途中から再開 ♪冬 Winter

「気力?」

「そうじゃとも。もうろうとしながら、歩いて歩いて—— 気力で船を操作して、となり町の港まで行って—— それから、フラフラしながらも気力で歩いて歩いて—— そうしてやっと、港の近くにある病院にたどり着いたんじゃ」

「——」

「もし、お前さんたちがおらんかったら—— もし、お前さんたちが毎年ここに訪ねてくれておらんかったら—— わしやあ、とつくに、完全にあきらめて—— 本当に死んでおった」

「——」

「お前さんたちは——、 ——わしの命の恩人じゃ」

「——っていうか、おじいちゃんこそ、僕の命の恩人じゃん」

「お互いに無事で何よりじゃった! うむ。うむ」 おじいさんは、泣いているのか笑っているのか、よくわからない表情をしていた。

「おじいちゃん——」 おじいさんの肩に頭をくっつけるようにしてかがみ、目を閉じた。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

## 66

「ライフは、この上ない宝——」 僕は、そうつぶやいた。

「そうじゃとも」

「——あ、そうだ！ わかった！」 そう言いながら僕は顔を上げた。

「ん？ 何がわかったのじゃ？」

「地図は、やっぱり宝の地図だったんだよ！ ——おじいちゃんの居場所を教えてくれていたから。アハッ！」

「——ありがとうよ。こんな、おいぼれジジイを宝じゃと言ってく  
れて。」

じゃがのお、おまえさんは、わしなんかと比較にならないほどの、  
はるかに、はるかに、すてきな、この上ない宝をすでに持っている  
んじゃよ」

「——」

「むろん、ほかならぬ、おまえさん自身のライフじゃ」

「——」

「わしにとっても、この上ない宝じゃ。そして、おまえさんのご両  
親にとっても、この上ない宝じゃ」

音楽イン ♪ Birthtime

「——」 なぜか、このとき、生まれて間もない僕をほっとしながら  
ら抱いている母と、それを写真に撮っている父の姿が心に浮かんだ。

「おまえさんが、かつて誕生して、今こうして生きていることは、  
決してあたりまえじゃない。それは、さまざまな幸運や、親を含む、  
さまざまな方々の多くの努力や力添えのおかげのことなんじゃよ」

「——」

「何と言っても、小さな子どもだった、お父さんとお母さんが成長して、思春期を乗り越え—— そうして、何らかの形で、めぐり会わなければ、おまえさんは存在していなかったのじゃからのお」

「——」 . . .

「それに、最初は、誰もがたった1つの細胞じゃった。そのたった1つから始まって、ここまで育ったのじゃから、それはもう大した幸運で、とってもありがたくて“あたりまえ”から程遠いことじゃ」

「——」

「それに、生まれてから何年もの間、誰もがみな、自分だけでは、ほとんど何にもできなかった。

例えば、生まれて間もない赤ちゃんの頃だったら、おっぱいやミルクを飲んだりも、おむつを換えたりも、お風呂に入ったりも…どれもこれも誰かの助けを借りて初めて達成できたことじゃ」

「——」

「そう言えば—— おまえさんのお父さんやお母さんが、赤ちゃんの頃のおまえさんと幼いお兄さんを連れて、わしのところにやってきてくれたときのことが、昨日のこのように目に浮かぶのお」

「——」 ——え！？ 手紙の中の“再会”って、そういう意味？

「——お父さんやお母さんは、子どものいない、わしら夫婦のことを思いやって遊びにきてくれたんじゃろうな。赤ちゃんだった、おまえさんやお兄さんを、わしと妻に抱っこさせてくれたよ。

——とっても、うれしかった。とっても」

全然、知らなかった。「——父や母や兄とお知り合いなのでしょうか？」 思わずかしこまって、そう尋ねた。

「お兄さんとは、赤ちゃんだったおまえさんと一緒のときに会ったつきりじゃった。小さかったから、おそらく、わしのことを覚えておらんじやろう。

じゃが、お父さんとお母さんとは、よく知り合っておる。お前さんらが生まれるずっと前からのお」

「——」 . . .

「まあ—— おまえさんらは、わたしの孫みたいなもんじやな。いや、ひ孫かな？」 おじいさんは、しばし、しみじみ心笑んだ。

「——」

音楽 ♪ Birthtime 67へ続く

## 67

「今、ここまで大きくなったおまえさんが、まず何よりすべきことは—— 自分自身のライフを、精一杯、大切にすることじや」

「——」

「——もちろん、いつまでも自分のライフだけを大切に続けなさいと言っておるわけではないぞ。なぜなら、自分だけを大切にしていって周囲を大切にしておらなければ、いずれ周囲が心身の健康を失ってしまい、その影響を受けて、結局は、自分自身を大切にできなくなってしまうからじや。

自分を愛することは、自分と周囲の両方を愛しておってこそ、本物になる——」

「——」

「むろん、周りだけを大切にたいせつし続けつづなさいと言いっておるわけでもな  
いぞ。なぜなら、逆さかに周囲しゅういだけを大切たいせつにして自分じぶん自身じしんを大切たいせつにして  
おらなければ、いずれ自分じしんが心身しんしんの健康けんこうを損そこなってしまう、そのせ  
いで、結局けつぎは周囲しゅういを大切たいせつにできなくなってしまうからじゃ。

じゃから、周囲しゅういを愛あいすることも、自分じぶんと周囲しゅういの両方りょうほうを愛あいしておっ  
てこそ、本物ほんものになる——。

つまり、自分じぶんのライフまわも周まわりのライフりょうほうも両方たいせつを大切たいせつにすることが  
だいじ大事だいじになるんじゃ」

「——」

「確たしかに、ときには自分じぶん自身じしん以上いじょうに大切たいせつな誰だれかを守まもるために、自分じぶん  
を犠ぎ牲せいにしなければならないこともあるかもしれん。

しかし、そもそも、その“自分じぶん自身じしん以上いじょうに大切たいせつな誰だれか”に本当ほんとうの  
意味いみでめぐりああうために、自分じぶんと相手あいての両方りょうほうを大切たいせつにし続けつづけておる  
ことが不可ふ欠かけつじゃろう」

「——」

「おまえさんも、自分じしんと周囲しゅういの両方りょうほうを大切たいせつにしながら本当ほんとうの意味いみで  
自分じぶん自身じしんをこの上うえない宝たからのように大切たいせつしておれば、将来しょうらい、おまえ  
さん以上いじょうの“この上うえない宝たから”と、きつとめぐり会あえるはずじゃ。

——そう信しんじて生いきておってよいんじゃ」

「——」

「——。むろん、その“この上うえない宝たから”は、わしのことではない。

——じゃから、おまえさんの人生じんせいは、本当ほんとうに、これからなんじゃ」

それでも、涙流なみだながしながら手紙てがみをか書いてくれたおじいさんのライフ  
も、間違まちがいなく、この上うえない宝たからなのだと思おもった。

## 68

「——うむ。やはり見込み通りじゃ。背もすっかり追い抜かれてしもうたし、声変わりも始まっている。——思春期ってやつじゃな？」

「——」

「いいのお、若いもんは——。これから、手紙通り若者と呼ぼうぞ。アッハッハッ！」

「——。——おじいちゃん？」

「——ん？」

「おじいちゃんの人生、これからも長いんだかね。これからも、まだまだ楽しいことやうれしいことが待っているかね」 そう言いながら、丸い石をおじいさんに、返そうとした。

「おっと、待った——。一度お上げしたもんじゃ。

どうか、お納めくださらんか？ お守りじゃと思つて——。

「——でも、奥さんの形見でもあるんでしょ？」

「妻には、365日24時間、いつでも会える——」

「——」

「もしものときは、わしらの形見じゃと思つてほしい。

よく考えてみたら、孫、ひ孫のような、おまえさんの手元にあるとわかっていた方が、安心で、幸せじゃ。それは妻も同じじゃと思ふ。——どうか、頼む。わしらのために、そうしてほしい」

「——わかった。大事にするよ」

「ありがとうよ」

## 69

それから、ランプベリーのことも含めて、この1年で考えたこと、感じたこと、やったことを、おじいさんに話して聞かせた。

「そうか—— ランプベリーのことは、つらかったのぉ」

「ああ——」・・・「——あ、でも、今は、もう大丈夫さ」

「——うむ」

「——」・・・

音楽イン ♪冬 Winter

思わず悲しげな表情をしてしまった僕に気づいたからか——

おじいさんは、静かに語り始めた。「まあ、動物にしる人間にしる、いずれ、いつかは、この地球から引退してしまう。

しかし、そのことにさえも重要な意味がありうるんじやよ」

「——」

「少し冷静に想像してみてほしい。地球上にライフデビューしたあらゆる生きものたちが一切引退しない場合にどうなるかを——」

「——」・・・

「まあ、科学技術が十分に育ち、ほかの天体へも含め、宇宙へ進出する可能性もあるだろうから、話は複雑じゃが——」

「——」・・・

「いずれにせよ、地球から引退することには、少なくとも、それによって未来の世代のためにスペースや資源を譲ってあげられるという大事な意味がありうるんじやよ。

そうやって、ライフあふれる地球をリレーし続けるんじや。

過去の世代から今の世代へと、今の世代から未来の世代へと、次

つぎ  
々と——」

「——」 . . .

「それは、わしらのように実の子孫を残せなかった存在にとっても  
同じじゃろう」

「——」

「それでも、そりゃあ、さびしいさ。さびしい。このライフあふれる地球からいなくなっちゃうのは——」

「——」

「じゃがのお、そのことで—— ただ悲嘆にくれたり、ただおびえたり、ただ投げやりになったり… するだけでは、つまらん結果を招いてしまうだけじゃろう」

「——」

「今生きている存在、自身を含むあらゆる生物たちはみんな、いずれ地球から引退してしまう。まずは、そのことを十分に受け入れる。

じゃが、決して、そこにとどまるのではないぞ。

“だから、どう生きたらいいのか。だから、どう生きたいのか。…”  
——つまり、“だから、どう生きるのか”こそをしっかりと見つめるんじゃ」

「——。だから、どう生きるのか——」

→ どう生きるのか——

音楽 ♪冬 Winter → ♪春 Spring

“だから、どう<sup>い</sup>生きるのか”  
こそを<sup>み</sup>しっかり見つめる

「そうじゃとも。

だから、どう<sup>かん</sup>感じ、どう<sup>かんが</sup>考え、どう<sup>こうどう</sup>行動しながら<sup>い</sup>生きるのか。

だから、<sup>じんせい</sup>人生で、<sup>なに</sup>何を<sup>せんたく</sup>選択しながら<sup>い</sup>生きるのか。

だから、<sup>だれ</sup>誰に<sup>なに</sup>何を<sup>つた</sup>伝えながら<sup>い</sup>生きるのか。

だから、<sup>だれ</sup>誰に<sup>なに</sup>何を<sup>あた</sup>与えながら<sup>い</sup>生きるのか。

だから、<sup>だれ</sup>誰に<sup>なに</sup>何を<sup>のこ</sup>残しながら<sup>い</sup>生きるのか。

だから、どのような<sup>じんせい</sup>人生の<sup>かた</sup>あり方を<sup>じつげん</sup>実現しながら<sup>い</sup>生きるのか。

…も<sup>ふく</sup>含めてじゃ」

「——」

「それは、結局、過去に新たに生まれた何か、今、新たに生まれて  
いる何か、将来、新たに生まれるだろう何かを見つめながら生きる  
ことにもつながるじやろう」

「——」 —— そうだ！ 過去に、太陽も、地球も、動植物も、  
人間も、自分も…新たに生まれた。

だから、未来に、新たに何かが生まれてもおかしくないんだ！

将来、新たに何が生まれるのだろう？

将来、新たに何を生み出せるのだろう？ ……

やっぱり—— 『カコ イマ ミライ』も、ワクワク<sup>わく</sup>だった？  
『カコ イマ ミライ』も、フレー！ フレー！ フレームだった？

……

「それらを見つめながら生きておれば——

将来の目標を健全に想い描けるようになるのかもしれないし、あ  
るいは、今生きていることの喜びを全身で感じ、瞬間瞬間を愛おし  
く思いながら過ごせるようになるのかもしれないし、あるいは、人  
生の実り、フルーツのような何かを、より良質で十分満足なレベル  
にまで高められるのかもしれない」

——おじいさんは、立てた親指を前後させながら、頭を少し傾け  
ながら、僕に心笑みかけた。

「——ああ。そうだね。——ありがとう」

それから、おじいさんと僕は、腰を下ろした状態で、しばらく  
水平線を眺め続けた。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

## 70

「——よし、それでは、そろそろ教えよう」とおじいさん。

「え？ 何を？」と僕。

「次のフレームをじゃ——」

「ああ、そうだったね」そのまま僕は固まってしまった。

「——ん？ では、地図をよこしておくれ」

「——って、やっぱり必要だよな」

「どうしたんじゃ？」

「——。誤って海の中に——」

「あ!？」おじいさんは、急いで立ち上がり、海面をのぞき込んだ。

地図が、どこにも見あたらないことを悟ったおじいさんは、しばらくの間、呆然と立ちつくしていた。

「——。——。おまえさん—— そいつを取り戻そうとして、海に飛び込んだってわけか——」

「——」僕は、小さくうなずいた。

「そうだったのか——」

——うむ、うむ。そうか、そうか。

わしゃあ、少し力が湧いてきたぞ」

「——」

「——さっき怒鳴って、損したぞ。アッハッハッ！」

おじいさんは、やはり誤解していたようで——

## 71

音楽イン ♪夏 Summer

「そうとわかれば——」<sup>あか</sup>明るく、<sup>い</sup>そう言うのと、おじいさんは、ゆっ  
くりしゃがみ、そのまま<sup>よこ</sup>横になった。

「——ん？」と僕。<sup>ぼく</sup>

「ひとまず<sup>ひるね</sup>昼寝じゃ」

「え？ ——<sup>ちず</sup>地図は<sup>だいじょうぶ</sup>大丈夫？」

「——。<sup>わかもの</sup>若者よ——」

「ん？」

「フレーム・マスターをなめちゃあいかん」

「いや、別に、<sup>べつ</sup>なめちゃいけないけど——」<sup>ひてい</sup>あわてて否定しながらも、  
ランプベリーがおじいさんの<sup>かお</sup>顔をペロペロなめているシーンが、<sup>こころ</sup>心  
に<sup>う</sup>浮かんだ。

「まあ、なんとかなるじゃろう。

それより、おまえさんも、たまには<sup>ひるね</sup>昼寝してみたらどうじゃ？

——<sup>ひるね</sup>昼寝にも、それなりに<sup>い</sup>意味がある。<sup>すこ</sup>少しは<sup>みなら</sup>見習え」

「——。 ——<sup>ひるね</sup>こっちは昼寝しなくていいよ。<sup>えんりよ</sup>遠慮しとくよ」

「そうか——。 じゃ、お先に」<sup>め</sup>目を閉じるおじいさん。

「——」 . . .

でも——

<sup>ぼく</sup>僕も、とりあえず<sup>よこ</sup>横になってみることにした。

でっかな<sup>あおぞら</sup>青空が<sup>ひろ</sup>広がっている——

<sup>しろ</sup>白い雲が、ゆるやかに<sup>なが</sup>流れている——

さわやかな<sup>しおかぜ</sup>潮風が、<sup>ぜんしん</sup>全身をなでている——

ここで横になると、こんな感じになるんだ——。  
けっこう気持ちいいかも——。

おじいさんは、幸せそうな笑みを浮かべながら横になっていた。

あれを、なくしちゃって—— 本当に大丈夫だろうか？

それなのに昼寝だとは—— ……

ったく—— ……

ああ、なんだか——

まぶたが—— だんだん重たくなってきたぜ——

ああ—— あれえ—— ……

体は、そうとう休みががっていたらしい。

僕は—— 不覚にも、そのままぐっすりと眠り込んだ。

音楽♪ 夏 Summer

サビのあたりから

そのままエンドロールに続く

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

## となりのコンパス③

### 第3 フレーム

『→』

【完】